

ラッシンググビート修羅

緑の絶望



月華守屋

挿絵 TARE活



ラッシンググビート修羅

砕けた決意



月華守屋

挿絵 TARE活



















CAMERA 1

















「んっ……やめっ……
きもち……悪い……」
舌は頬を左右に横断し、臭気を堪えて
閉じた唇の上を這い回る。

他の舌はシャツの上から乳房を撫で回して
唾液の軌跡を描き、太股を舐めた後に
シヨートパンツの隙間から股間の内側へと
入ってくる。



「グウウウウウウウ……」
怪物は動かなくなつた
エルフィンへと近づいていく。
その足音を、エルフィンは
瞼を閉じながら聞いていた。

（動いて……動いて……よ……私の体……
……このままじゃあいつに……
あいつに……殺される……）



しかし、注ぎ込まれたジーカスは膣内から
吸収されてその特性を発揮する。
細胞を変質させて、理性を失わせるジーカスの
圧倒的な強制力の前に、エルフィン左手を
シヤツの上から乳房に触れさせて揉み、
右指を膣へとこすりつけながら
快楽を味わい始めた。

「だ……だめ！　だめえ！
はっ……はっ……はっ……
流されちゃ……だめ……だめなの！
い……ひっ……あんっ……はあう！
あっあっあっあっあっあっあっあっあっ……
わずかに残ったエルフィンの理性が
快楽に堕ちることを否定する。」



異形と変わっていく自分の姿を
見ることですら興奮し、快楽に繋がった結果、
エルフィンは何もされることがないまま
絶頂していた。

「オオオナカアアア！ 大きく！
オオキクウウウ！ ヒギアアアアア！
イグッイグッイグッイグッイグッイグッイ
グッイグッイグッイグッイグッイグッイ
アハアアアアッ！」



「いやあああああああああ！
うあああああああ！
あああああ！ あーっ！」

エルフィンの全身に痛みを与えているのは、
電流檻だった。進行方向を塞いでいた
電流格子に向けて、メタルフレームは
捕まえたままのエルフィンを押しつけていたのだ。



「これで終わりだ！」
「や……やめ——」
エルフィンという言葉を聞かないままにボブは
上段から一気に腕を振り下ろす。
怪力から繰り出されたパワーボムは
エルフィンを後頭部から床に強く叩きつけた。

「……っ!?」
メタルフレームとの激闘で
痛んでいた床がわずかに陥没する。
叩きつけられたエルフィンは
致命的な何かが壊れる音が聞こえた。



「うあつやつめつ……

やめ……ろお……おおお……

ううう……ううう……ううう……」

涙声でも従順になりきれないエルフィンに、別の男が顔を引き上げるとペニスを挿入していた。

喘ぎ声以上に生臭いペニスが口をつぐませる。

「オオアウオアオウアオオツ
オオオオオオオオ……」



(わたし……なんにも……できなかった……
わたし……わたし、は……うつ……
アツアツアツアツアツアツアツアツ……)
エルフィンには、這い上がる力も、
救ってくれる者もない。
今や彼女をわずかでも現実にとどめる悲しみも、
快樂に塗りつぶされてバラバラになっていく。

「アツアツアツアツアツアツアツ……
ンウウウアアアアツ！
イ……ク……アアアアアアツ！」
心がひび割れる音を嬌声で覆い隠しながら、
エルフィンはまた絶頂へと達して
意識を白く濁らせた。



「んっ……やめっ……
きもち……悪い……」
舌は頬を左右に横断し、臭気を堪えて
閉じた唇の上を這い回る。

他の舌はシャツの上から乳房を撫で回して
唾液の軌跡を描き、太股を舐めた後に
ショートパンツの隙間から股間の内側へと
入ってくる。



「グウウウウウウ……」
怪物は動かなくなった
エルフィンへと近づいていく。
その足音を、エルフィンは
瞼を閉じながら聞いていた。

（動いて……動いて……よ……私の体……
……このままじゃあいつに……
あいつに……殺される……）



しかし、注ぎ込まれたジーカスは膣内から
吸収されてその特性を発揮する。
細胞を変質させて、理性を失わせるジーカスの
圧倒的な強制力の前に、エルフィン左手を
シヤツの上から乳房に触れさせて揉み、
右指を膣へとこすりつけながら
快楽を味わい始めた。

「だ……だめ！　だめえ！
はっ……はっ……はっ……
流されちゃ……だめ……だめなの！
い……ひっ……あんっ……はあう！
あっあっあっあっあっあっあっあっ
わずかに残ったエルフィンの理性が
快楽に堕ちることを否定する。」



異形と変わっていく自分の姿を
見ることですら興奮し、快楽に繋がった結果、
エルフィンは何もされることがないまま
絶頂していた。

「オオオナカアアア！ 大きく！
オオキクウウウ！ ヒギアアアア！
イグツイグツイグツイグツイグツイグツイ
グツイグツイグツイグツイグツイグツイ
アハアアアアッ！」



「いやあああああああ！
うあああああ！
あああつ！ あーっ！」

エルフィンの全身に痛みを与えているのは、
電流檻だった。進行方向を塞いでいた
電流格子に向けて、メタルフレームは
捕まえたままのエルフィンを押しつけていたのだ。



「これで終わりだ！」
「や……やめ——」
エルフィンという言葉を聞かないままにボブは
上段から一気に腕を振り下ろす。
怪力から繰り出されたパワーボムは
エルフィンを後頭部から床に強く叩きつけた。

「……っ!?」
メタルフレームとの激闘で
痛んでいた床がわずかに陥没する。
叩きつけられたエルフィンは
致命的な何かが壊れる音が聞こえた。

「うあつやつめつ……」

やめ……ろお……おおお……

うづうづ……うづうづ……うづうづ……」

涙声でも従順になりきれないエルフィンに、別の男が顔を引き上げるとペニスを挿入していた。

喘ぎ声以上に生臭いペニスが口をつぐませる。

「オオアウオアオウアオオオッ
オオオオオオオオ……」



（わたし……なんにも……できなかつた……
わたし……わたし、は……うっ……
アッアッアッアッアッアッアッ……）
エルフィンには、這い上がる力も、
救ってくれる者もない。
今や彼女をわずかでも現実にとどめる悲しみも、
快樂に塗りつぶされてバラバラになっていく。

「アッアッアッアッアッアッ……
ンウウウアアアッ！
イ……ク……アアアアアアッ！」
心がひび割れる音を嬌声で覆い隠しながら、
エルフィンはまた絶頂へと達して
意識を白く濁らせた。